

要求対象指示技能を育てる試み(自立活動の時間における指導より)  
～「チョウダイ身振り」から「視線を伴う手差しや叩き身振り」への移行の試み～

新保利久

### 1. はじめに

音声言語をもたない知的障害児の中には要求伝達において要求意図はあっても「誰に、何を」が明確でない児童がしばしば見られる。周りの大人はそれらの児童と付き合っていると、児童個々のしぐさとその時の文脈から「この子のこのしぐさは要求意図である」ということが帰納的に理解できるようになる。周りに大人が一人だけで、物が目の前に1種類だけある状況では要求依頼人や要求対象は明らかであるが、複数の人がいたり物がある場面や、離れたところに物がある状況の時には聞き手の大人は児童の要求依頼人や要求対象物を推測しかねることがある。そのような児童が要求依頼人や要求対象物を特定する技能を獲得すれば大人も子どもも互いに困る状況が改善されることになる。

ここでは、重度知的障害を伴う一人の自閉症児に「チョウダイ身振り」から「視線を伴う手差しや叩き身振り」への移行の指導を試みる。

### 2. 対象児

Y児小学部2年 自閉症 7歳4か月(指導開始時)

伝達に際して音声言語は無く、機嫌の良い時、不快な時ともに「キャー」などの大声をだす。拍手を事物、行為の要求表現に使う。拒否は大人の腕を払うことで伝える。要求物を直接手で取る直接行動がある。その際の手差し身振りは要求伝達性よりも対物志向性が強い。

KIDSの結果 運動1:8 操作1:5 理解言語0:8 表出言語0:7 概念0:0 対子ども社会性1:1 対成人社会性1:0 しつけ2:3 食事1:3 で総合発達年齢は1歳2か月であった。行動観察から評価された感覚運動知能は第4段階と推測された(お菓子を食べるために箱をさがす様子が観察された)。Communication assessment<sub>1)</sub>に照らし合わせるとステージIVのカテゴリー3(対物志向性の手差し)であった。

なお、指導前は大人を見ながら拍手の出現率は30%~40%台であり、大人を見ながら手差しの出現率は9%であった。

### 3. 指導の方法

大井(1992<sub>2)</sub>)は伝達性を増すためには「身振りと視線の協応」「指示身振りの使用」が必要であると言い、そのためには大人が子どもの非言語表現を模倣することが有効であると述べている。

これまでの観察によると本児には伝達性の拍手や手差しの芽生えが見られるので要求対象指示、明確化の技能の獲得は可能と考える。そこで指導Iで、チョウダイ身振りの拍手中に大人を見ることを定着させ(相手の特定化と意図の伝達化)、指導IIで要求対象指示身振りの「手差し」や「叩き身振り」や「手渡し」を使うことを教えるという順に進めることにした。

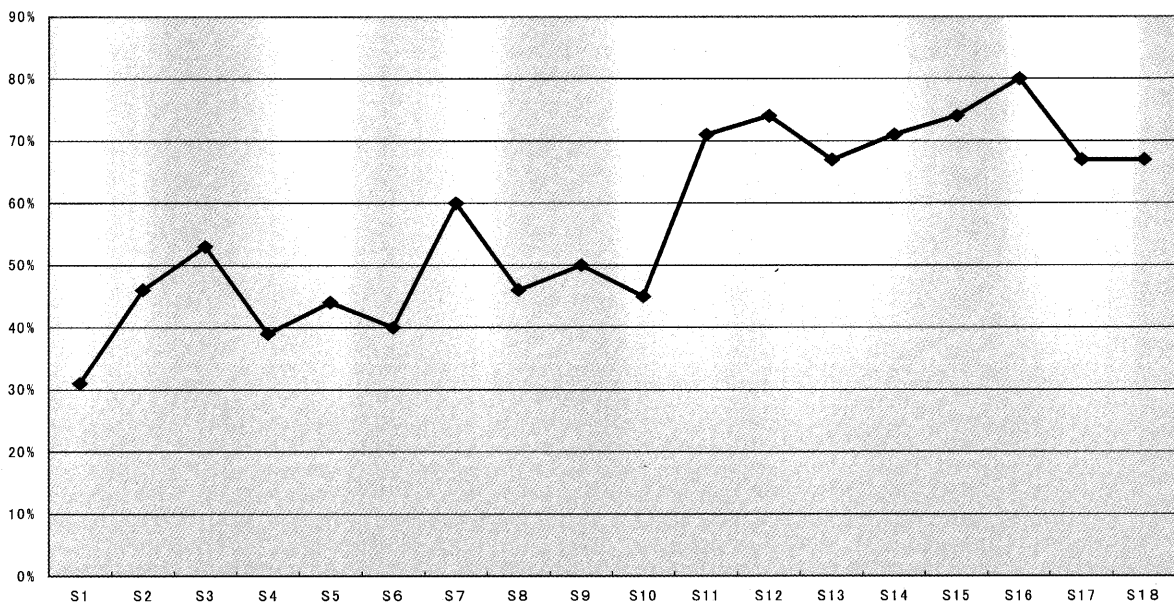
指導は自立活動の時間における指導で、週に2回、1回の指導時間は15分~20分である。

	指導 I	指導 II	
		単一事物場面	複数事物場面
指導期間	4月～7月 (S1, 2はベースライン)	9月～12月 (S1～18はベースライン)	1月～3月 (予定)
目標	聞き手を見ながら拍手する	大人を見ながら求めるシールや、おやつやおはじきに手差しをする	大人を見ながら求める物や行為の写真カードに手差しや叩き身振りをする。または手渡す
場面	シール貼り・ポテトチップスを食べる・自転車の籠乗りの3場面を設定する。シール10枚、ポテトチップス10枚、自転車の籠乗り10回で計30回要求場面を設定する	シール、おはじき、ポテトチップス1種類が手の届かないところに置かれる。各場面で10回計30回の要求場面を設定する	課題・おやつ・遊びの各場面で2種類の写真カードが手の届くところに置かれる。課題場面〔シール・おはじき〕遊び場面〔おんぶ・Gボール〕おやつ場面〔ポテトチップス・おとと〕。1回のセッションで10～15回の要求場面を設定する
		各場面とも大人と子どもは物を挟んで向き合う	
伝達内容	シールやポテトチップスを渡すよう求める。再度自転車を運転するよう求める	教師にシールやおはじきやポテトチップスを1つ渡すように求める	教師に希望する物や行為を求める
教師の応答	Y児の拍手を教師が模倣する	Y児の拍手に対して手差しをする。Y児が手差しをすると教師が模倣する	Y児の拍手に対して手差しまたはトントンと写真カードを叩く。Y児が手差しや叩きをすると教師が模倣する

#### 4. 結果と考察

##### (1) 指導 I

指導前のY児の「チョウダイ身振り」で拍手中の視線をとまなうものは30%～40%台であった。S3からS10までは40%台から60%台を上下している。S11以降は70%前後を維持するようになった。S15ではおやつでY児が教師を見ないで拍手をした時に教師がおやつを故意に渡さないでいると再度、教師を見ながら拍手をしてきた。これは、Y児が要求の意図を効果的に相手に伝える技能を獲得しつつあることの現れとみることができる(図1)。



指導前 ← | → 指導 I

回数

図1 チョウダイ身振り中の視線の併用の割合 (指導 I)

## (2) 指導Ⅱ 単一事物場面

S20以降から机を手でポンポンと叩いて物を要求する様子が見られた。チョウダイ身振りの一つと思われる。S25では手差しと机叩きを複合する様子が見られた。S26では机叩きの後、手差しをすることが2回あった。S27では同じ机叩きでも物へ向かって腕を伸ばして机叩きをしていた。大井（1992<sub>2</sub>）の事例にも「叩き身振りと合掌を複合して使うことが多かった」との報告が記載されている。手差し中の視線の併用はS25以降は上下しながらも50%前後かそれ以上の割合で見られた。

日常場面でのエピソードを1つ挙げる。教室でホットケーキを作った際に担任が持っているホットケーキへ向かって担任を見ながら手差しをして手渡すように要求を伝えていた。

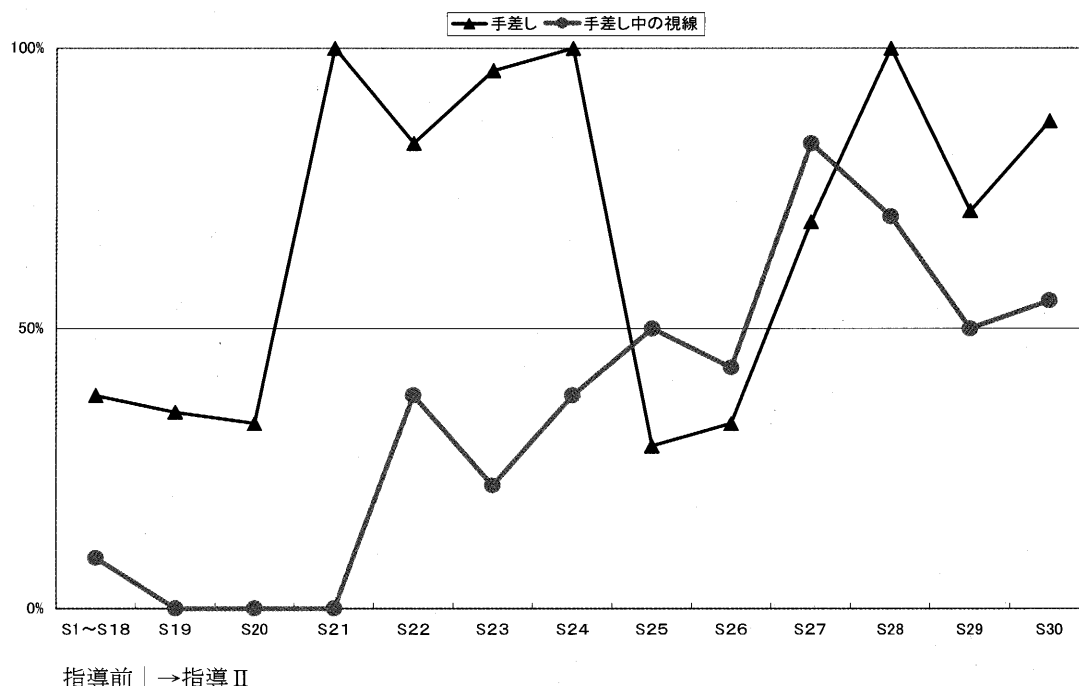


図2 単一事物場面の要求における手差し身振りの出現率と手差し中の大人への視線の出現率の時期的な変化

出現率 = (手差し数 / 要求数) × 100 及び (手差し中の視線の併用数 / 手差し数) × 100

## 5. まとめ

重度知的障害を伴う一人の自閉症児に「チョウダイ身振り」から「視線を伴う手差しや叩き身振り」への移行の指導を試みた。その結果、「要求対象指示身振り」の手差しの技能が獲得された。また、身振り中の視線の併用の割合も高くなり、伝達性が増した。

大人の対応の仕方では「子どもの身振り模倣と身振りモデルの提供」という技法（大井1992<sub>2</sub>）は有効であることが確認された。

指導Ⅱの複数事物場面での指導については今後試みる予定である。

### 〔参考文献〕

- 1) Debra Labato, Ricardo D. Barrera, and Robert S. Feldeman (1981)  
Sensorimotor Functioning and Prelinguistic Communication of Severely and Profoundly Retarded Individuals American Journal of Mental Deficiency 1981 Vol. 85 No. 5 489-496
- 2) 大井 学 (1992) 大人との交渉を通じた重度精神遅滞児の前言語的要求伝達の改善  
特殊教育学研究、30(2)、33-44、1992